

【千葉テレビ放送賞】

たんじ つとむ
丹治 勤

追憶のきみへ

街はクリスマスが近づき、ざわめいていますが、この時季になると、純情だった中学生時代の君との思い出が蘇ります。

当時は、手編みのマフラーや手袋を編んでプレゼントするのが、流行っていましたが、まさか、君からいただけるとは夢にも思っていませんでした。

実は僕も、隣のクラスで目立つ君に、思いを寄せていました。

今でも鮮明に、あの情景は覚えています。学校近くの公園で待ち合わせた午後、制服姿の君が僕を待っていてくれて、近づくと「これ、クリスマスプレゼント。」そう言ってマフラーをくれました。「あっ、ありがとう。」それしか言えなかった。嬉しかったけど、純情で何も言えなかった。君はもう背を向けて歩き始めていた。後ろ姿にもう一度「ありがとう」と言うと、立ち止まった君は、振り向かずに「ウン」と頷いて、また歩き出した。

後にも先にも、君と交わした言葉は、僅かこれだけでした。

マフラーには、君と僕のイニシャルのMとTが編み込まれていました。

…そして、君と僕は別々の高校へ進学して、それっきりお逢いしていませんね。

あれから半世紀、還暦も過ぎましたが、今でも思い出すと胸がキュンとなり、同時にほっこりします。素晴らしい思い出のプレゼント、本当にありがとう。配達されない手紙ですが、もう何度も書きました。君の幸せ、心から祈っています。心から…。

(東京都/64歳/男性/会社役員)

今でも忘れられない思い出をプレゼントしてくれた「君」へのお礼の気持ちです。半世紀前にタイムスリップして、純情だった中学生の気持ちで書きました。